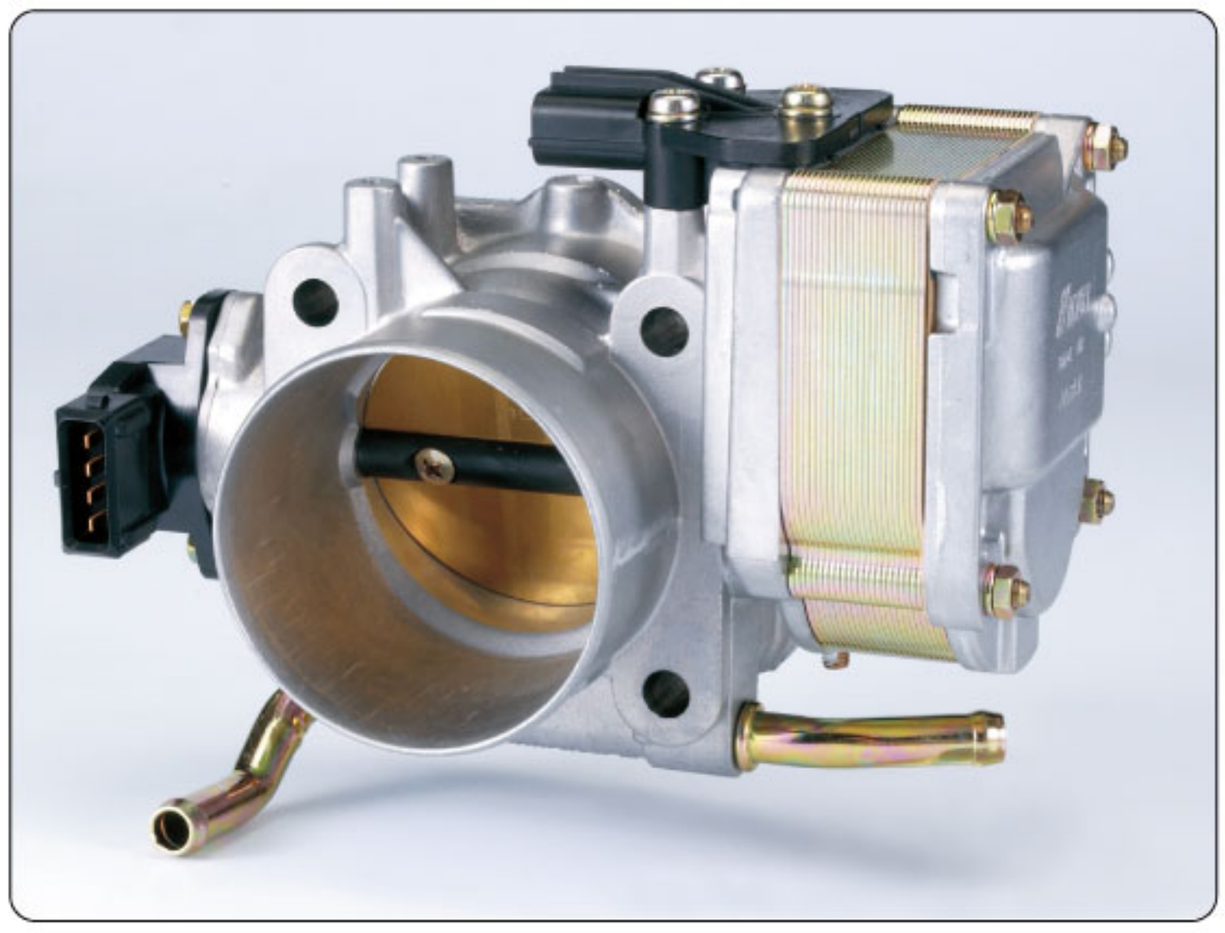
長年の運用に終止符を打ち NECの汎用機からiSeriesへリプレース



株式会社ミクニ

Corporate Profile	
設立	1948年10月
資本金	22億1530万円
従業員数	2300名
代表取締役社長	生田允紀
本社	東京都千代田区外神田6-13-11
URL	http://www.mikuni.co.jp/

膨大なCOBOLプログラムをコンバージョン

自動車用燃料供給系製品、いわゆるキャブレターやスロットルボディといった自動車部品の製造・販売で高い実績を誇るミクニ。最近はその技術力を活かして、介護用品やガス用安全装置など、多様な事業展開を図っている。

同社は1982年に、NECの中型汎用機である「ACOSシステム450」を導入して以来、20年の長きにわたって、汎用機の利用を続けてきたが、今年7月、メインフレームユーザーとしての長い歴史に終止符を打ち、新たに「iSeries M810」を導入した。

長年使い慣れた汎用機からiSeriesへリプレースした理由はどこにあるのだろうか。その導入の背景を探ってみよう。

同社は、製品・部品MRPから資材購買、人員計画などの生産管理システムを中心に、販売管理や会計・人事・給与といった基幹業務システムの一切を、汎用機上で自社開発(一部パッケージ使用)してきた。しかし1995年に導入した「ACOS PX7500」がリースアップを迎える2000年が近づくにつれ、夜間バッチ処理が翌朝にずれ込むなど、処理能力が限界を迎えていたようだ。

そこで、次期導入機種の検討がスタート。同社はこの時、汎用機にこだわらず、他のプラットフォームへの移行を含めた広い視野で導入機種を検討する方針を固めた。

「できればメーカーは変えたくない」という意向から、当初はNECへ提案を依頼した。しかしNECは、長年の運用歴を重視して、汎用機の継続運用を提案してきたという。

「現在のIT業界の状況から判断して、国産汎用機の将来性には少なからず不安を抱いていました。しかし、だからと言ってオープン系のUNIXサーバーなどへ移行しても、安定的に運用できる保証はありません。当社では国内の拠点数が多く、全拠点からの利用を想定した場合、オープン系ではサーバーの分散導入で対応せざるを得ません。それは運用管理業務の増大を意味するので、できれば避けたい選択です」(情報システムセンター山岸秀一副センター長)

一方、プログラム資産の継承という問題も大きく横たわっていた。20年を費やして同社が改良を重ねてきた業務システムは、自社要件を反映した非常に完成度の高いものとなっている。特にMRPを中心とした生産管理システムは社内外で評価が高く、海外拠点からも利用したいとのリクエストが寄せられていた。

「ホストを移行しても、そうしたプログラム資産は継続的に利用したいと考えていました。昨今はオープン系で運用するERPパッケージが話題ですが、自社ニーズにマッチした、これほど可用性の高いシステムを捨てて、いま、ERPへ移行する投資メリットは小さい。ERPの導入はコスト的にも、また業務面でも社内に大きな負担を強いることになります」(神山秀一執行役員　情報システムセンター長)

将来性があり、安定的な運用が可能で、しかもプログラム資産を継承できる新しいプラットフォーム。

PX7500

占有スペースの違いも、iSeriesの導入決定理由の一つとなった。

iSeries M810

そこで浮上したのが、iSeriesであった。

MRP処理が4時間半から15分へ

同社は今回の導入決定に先立つ2001年3月に、財務会計パッケージ「MONEY 400」を運用する新しいサーバーとして、「iSeries M270」を導入していた。その安定性に着目していた同社は、導入・構築を担当した日本ビジネスコンピューター(JBCC)へ、次期導入の提案を依頼した。

焦点となったのは、汎用機上で開発された膨大なプログラムのコンバージョンである。同社にはCOBOLで開発された4000本近いプログラム資産がある。すでに使用を中止している、あるいは使用頻度の低いプログラムを整理しても、コンバージョンの対象となるプログラムは2000本を超えるはずである。

「JBCCからは、移行は可能であると提案を受けていましたが、新しい環境で、今まで通り支障なく、同じ業務システムを本当に運用できるのか、大きな不安を感じました」(神山センター長)

そこで、やはりiSeriesユーザーであり、汎用機からほぼ同規模のCOBOLプログラムのコンバージョンに成功した三洋電機に移行状況を確認し、「問題なし」と最終判断したうえで、導入を決定した。2001年11月のことである。

翌2002年1月に、iSeries M820を導入。約1年をかけて、コンバージョン作業を進め、2003年6月にiSeries M810へリプレース。iSeries M270上で稼働していた財務会計システムも移行し、今年7月に全業務システムが新しいホスト上で本稼働を迎えた。以降、安定的な運用が続いている。

「汎用機時代には約400台のオンライン端末を利用していましたが、ほぼ同数のPCにPCOMエミュレータを導入しました。全国の拠点でこの作業を行うのは大変でしたが、当社では、汎用機のCUI画面を長く使っており、結果的には5250画面のおかげで、ユーザーが違和感なく移行できたように思います。また海外拠点からは、インターネットや帯域の狭いネットワークを使ってアクセスしますが、5250画面はデータ量が小さいので、その点でも運用性は高いですね」(山岸秀一副センター長)

パフォーマンス向上による処理能力の強化は、業務のさまざまな面で改善効果をもたらしている。たとえばリプレース前は、汎用機で平均4時間半を要していたMRP処理は、現在はわずかに15分と、約20分の1に短縮された。これにより納品までのリードタイムが約1日分、短縮されている。

さらに汎用機と比べた場合、導入コストの減額効果も大きく、同社では2004年には年間の基幹系システム費用をACOS時代に比べ約半分にできると期待している。

神山秀一
情報システムセンター
センター長
執行役員

山岸秀一
情報システムセンター
副センター長

同社は昨年10月に、ガス用安全装置などの開発・製造を担う100%子会社、ミクニアデックを吸収合併した。ミクニアデックでも、NECの中型汎用機の下位モデルを導入していたが、現在はその業務システムをiSeries M810へ統合するための開発作業が進められている。

やはりここでも、COBOLプログラムのコンバージョン作業が発生する。親会社に比べると、そのボリュームは3分の1程度であるというが、今回の導入経験を活かせば、移行作業がよりスムーズに進むことは間違いなさそうだ。